

日本古典文学における〈林〉の変遷―後編―

池原陽斉^{*1}
松岡芳恵^{*2}

本稿では、日本古典文学のうち、上代文学から王朝文学までを主たる対象とした前編を引きついで、中世文学から近世文学にかけての〈林〉の様相と、類義語〈森〉との関係を取りあつかった。中世文学においては、〈はやし〉はうたことばとして使用されたり、風景の一部として登場したりするのが主であり、〈もり〉とのあいだに格別の差異はない例がおおい。ただし『今昔物語集』のように、作品レベルでは怪異的な〈はやし〉が登場する例もある。くだつて近世文学では、俳諧辞書『類船集』において神社と〈もり〉、寺と「林」という対比があり、連歌の世界では明白な区別がある。この分化は、読本『雨月物語』でも、当該作品が仏教と関係がふかいことで用例が〈はやし〉に集中する等、一定の普遍性がある。一方で『南総里見八犬伝』になると、〈はやし〉〈もり〉は併用されるが、機能面の差異は見いだしがたくなる。中世以来の伏流をうけついで、近代にいたる潮流をみとめることができるだろう。

キーワード…中世文学、近世文学、林、森、怪異

はじめに

本稿は「日本古典文学における〈林〉の変遷」との題目がしめすように、日本の古典文学において〈はやし〉がどのように登場し、どのように表現されているのかを調査し、検討することを目的とする。より具体的には、上代から中古の散文を主たる対象と

した前編を受けて、一部かさなる点をふくみつつも、それ以降の平安後期から江戸期までの作品が検討材料となる。

もちろん平安後期から江戸期というと、おおよそ七百年の時代を縦断することになるし、しかも年代がくだればくだるほど、現存する作品点数は増加の一途をたどるから、これを鳥瞰的に把握することはほとんど不可能にちかい。

いきおい点描的な調査と、それにもとづいての検討にならざるをえないが、まずは古辞書（近世までの辞書）・類書（現代の百科事典に相当）のような、〈はやし〉になんらかの定義をあたえている工具書をそれぞれの時代の基本的な把握の材料としておさえる。そして、そこから作品の検討へと論を展開することで、ある程度の概括的な把握は可能となるだろう。

ひとつの橋頭堡であることを自覚して、いくつかの作品にわたっての〈はやし〉のあり方を追跡し、中近世における〈はやし〉の一樣相をしめしたい。

また、〈はやし〉の類義語として〈もり〉が存在することは自明のことであるが、この似てことなる二種類の語彙が、どのように関係し、どの程度意味領域をかさねさせているのか、それは時代や作品によって差異のあるものなのかどうか、という点も本稿の重大なテーマのひとつとなる。近代以降においては、〈はやし〉と〈もり〉とを概念的に区別することは困難であろうが、それ以前となる古典作品では、それぞれがどのようなありかたをしめしているのかを明確にし、その接点をみだしていききたい。

以上、二本のテーマを掲げて具体的な検討にはいる。¹⁰

一 古辞書における「林」の訓と〈もり〉との通用

それでは、中世文学における〈はやし〉の様相を追うことが目的となるが、その前段階として、平安後期以降の古辞書等において、漢字「林」がどのように訓まれているのかを確認したい。

まず観智院本『類聚名義抄』を例にとると、漢字によっては何十もの訓を掲載することもあるこの辞書にしてはめずらしく、音読の「リン」のほかには「ハヤシ」「キミ」と、ふたつの和訓しかない¹¹。

「ハヤシ」訓についてはとくに問題はないが、「キミ」の和訓があるのは、現行の表記意識からすると異様だ。意味としては、黒川本『色葉字類抄』に「公^{キミ}林君^{七同}」¹²とあるように、「公」「君」などとおなじく君主をしめす。

しかし、これは元来「林」と「臨」¹³とが通音であることによる漢語での用法であり、『大漢和辞典』¹⁴にも引用される例だが、「林、段借爲^レ臨」（『説文通訓定聲』）とあるとおりだろう。

つまり、和訓「キミ」は音によって生成されたもので、表語文字¹⁵たる漢字の「林」が含意するものではない。また、訓点資料でも「林」を「キミ」と訓んだ例は知られていない¹⁶から、この訓読を日本語の一般的な用法と解することは、おそらく無理だと思ふ。漢籍での用法が、古辞書にとられているにとどまるものだろう。

すると古辞書において「林」は、さかのぼって九三〇年代成立と目される『和名類聚抄』に「和名波夜之」¹⁷と訓まれて以来、基本的に「ハヤシ」と固定的に訓読される漢字と認定でき、意味としても同書が『説文』をひいて「平地有^二藁木^一曰^レ林」と説明しているのが、「平地」とある点は多少わりびいて考える必要があるだろうが、だいたい通用しているとみていい。

一応「平地」という点に留意するならば、おなじく漢籍の「風

俗通義」をひいての説明ではあるが、『書言字考節用集』に「樹木之所叢生^{スル}也」^九とある方が、あとでふれる「山林」などの用例も考慮にいれた場合には実態にそくしているとはいえる。とにかく「樹木」が鬱蒼としていれば「林」というわけで、それ以外にこのことを規定する条件はなさそうである。

ともかくも、「林」の通訓が「ハヤシ」であること、この点は動かない。つまりA論文^十で、すくなくとも辞書レベルにおいて漢字「森」が現行の定訓「モリ」におちつくには、室町時代の節用集等の登場を待たねばならなかったことを指摘したが、これと対比して、「林」はやくから「ハヤシ」と訓まれており、しかも固定的であることが確認できる。

一方で、古辞書からはなれることになるが、訓点資料に例をもとめると、「林」を「モリ」と訓んだ例が十二世紀前半にあり^{十一}、孤例ではあるものの、木々が鬱蒼としげった地形を「はやし」とも「もり」ともいい、また和訓「モリ」が漢字「森」に対応し、固定化される以前においては、限定的に使用されるものではなかったことも注目してよいだろう。

この点をふまえると、『古語大辞典』(小学館)の「はやし」についての以下の説明は、再考の余地があるかもしれない。

「は(生)ゆ」の他動詞形が「は(生)やす」。その連用形名詞「は(生)やし」からできた。樹木を植えて生やしてある所、または伐らずに生やしてある山の意。だから林には人為・

人工の語感がある。類似語の「森」は「盛(も)り」で繁茂の意があり、自然物の語感が強い。「杜の森」は多いが、「杜

の林」はない。^{十二}

いわゆる語源説を考慮して、「はやし」と「もり」の語義をきりわけの見解である。もちろんべつの語形をもつことから、原義はことなっていたに相違なく、適切な理解だろう。しかし、この理解を実態的な、作品レベルでの語義の解釈に直接させよいかどうかは疑問もある。

ふるくは『萬葉集』に「橘の林を植えむ」(巻十・一九五八)^{十三}というような例もあるから、『古語大辞典』の説明にもうなずかれる点はあるが、確実に年代の先行する例として、同書に「み雪降る冬の林に」(巻二・一九九・柿本人麻呂)^{十四}のような、人工的な樹木の集積とは考えられない「はやし」も存在するから、語源説は語源説として、そのような区別は古典語全般の問題といえるだろうか。

むしろ『岩波古語辞典 補訂版』が、「はやし」を、「①樹木を植えて生やしてある所」「②樹木の群生した所」^{十五}という二項目にわけて、いずれも初例に『萬葉集』をあげているあたりに、文献で知られる古語のレベルから、『古語大辞典』が説くような区別をみとめることが、きわめて困難とかえってしめされている。『文明本節用集』や『日葡辞書』などの説明も、木々の繁茂したところ、という点に集約できるもので、前記の例などは、むしろ「植えむ」とあるから植林と判断できるまでであって、「はやし」の語性としてはとらえにくい。

最後に「杜の森」の例をひいてのことからも察せられるとおり、神域の意からはなれた「もり」は、「はやし」と積極的に区

別することはできないだろう。

すくなくとも、両者が木々の集積のさす語彙に転じたとき、その区別はいまいなものになったとみてよいと思う。

この〈はやし〉と〈もり〉との通用に関しては、たとえば謡曲「求塚」に、つぎのようにあるのは参考になる。

所々の有様にも、などかは御覧じ知らざらん。「ワキへ向き）まづは生田の名にし負ふ、これに数ある林をば、生田の森と

はしろしめさずや。^{十六}
み吉野志賀の山桜、竜田初瀬の紅葉をば、歌人の家には知るなれば、所に住める者なればとて、生田の森とも林とも、知らぬ事をなのたまひそよ。^{十七}

引用書の訳によれば、前者は「ここに多くの木々のある林これを生田の森であるとは」、後者は「生田の森とも林とも」とあり、〈はやし〉をいいかえることばとして、〈もり〉が利用されていることは疑問の余地がない。

文中にみえる「生田の森」は平安時代以来の歌枕で、「求塚」でも「歌人の家には知るなれば」とあるとおり、その文脈で使用される。この著名な〈もり〉を〈はやし〉と換言できるということとは、両者にはおおきなちがいのないことを如実にしめしているといえるだろう。

また引用書は宝生流の寛政版本を底本とするが、頭注によれば、「車屋本及び金剛・喜多の二流は、「見えたる林をば」。観世流は「見えたる木立をば」^{十八}とあり、観世流の台本においては「森」が「木立」とも通用していることがわかる。

あるいは、直接に〈もり〉と〈はやし〉が結びつく例ではないが、『海道記』に「カクテ森々タル林ヲ分テ」^{十九}という文句があるのも注意されてよいだろう。

この「森々」は、現在でも「深々たる」とほぼ同義で使用されるが、ここでは「林」と「森」という漢字の共通性がこの用字を選択させたとも推測でき、やはり二語のちかさを感じる。

話を「求塚」にもどせば、木々の集積した場所は〈もり〉とも〈はやし〉とも〈こだち〉も呼ぶことが可能であり、語義的には厳密な差異はないといっていいたいだろう。

やはり、語源でなく古語のレベルとしては、〈はやし〉〈もり〉のあいだに、積極的な差異をみいだす必要はないだろう。

二 歌語としての〈はやし〉

さて、前節では古辞書の記載を軸として、「林」の訓読、また〈はやし〉と〈もり〉の通用に言及して、その語義を確認した。

本節以下では、具体的な作品の用例にもとづいて、〈はやし〉ということばがどのようなようにもちいられているのかみていきたい。

さきに『岩波古語辞典』をひいて、現行の古語辞典における〈はやし〉の分類の一端をしめたが、この辞書の分類はじつの特異なもので、むしろ以下に引用する小学館『古語大辞典』のように分類する場合が多い。

① 樹木が生い茂っている所。

② (比喩的に) 物事が多く集まっている所。

基本的には、この分類に問題はないと思うが、和歌にひきつけて考えた場合、やはりうたことば、うたまくらの問題は無視することができない。

『萬葉集』以来の例として、星々のまたたく夜空を譬喩した「星の林」があり、また中古以来の例としては、鳥とのつがいでもくもちいられる「竹の林」、あるいは雲林院を意味する「雲林」を歌語として訓読した「雲の林」などの固定的な用法がある。

一応、「雲の林」と「星の林」について、中世の著名な歌集から引用する。

五月ばかりに雲林院の菩提講にまうでてよみ侍りける

むらさきの雲の林をみわたせばのりにあふちの花さきにけり

(『新古今和歌集』巻第二十・釈教・肥後・一九二九)

郭公をよめる

ときつとりながね雲井にとどろきてほしのはやしはうづもれ

ぬらん

(『散木奇歌集』夏・二四四) 二十

上記のような例をひくことができるが、前者は詞書に「雲林院」とあり、後者も雲に「ほしのはやし」が隠れてしまったとの例だから、歌意をとるうえで困難な点もない。

さて、この三種の歌語を『古語大辞典』によって分類すれば、「星の林」はあきらかに②で、「竹の林」は①、また「雲の林」は成句なので、いずれともわかちがたいというように、種々の用法をみとめることは容易である。

しかし、そのように区分けることにはあまり意味はないと思う。A論文で和歌における〈もり〉について指摘した点とおおむねか

さなるが、固定的な歌語としての用法が、和歌における〈はやし〉の用例のかなりの部分をしめていることともに、実体的な叙景としての〈はやし〉を詠むということが基本的なみとめがたい点を特色としてしめれば、それで十分だからである。

ことばとしては中古に用例があるものの、歌語としては中世以来定着する「鶴の林」についてもちがいがいえる。

釈迦入滅の際に、季節はずれに咲いた沙羅双樹の花の舞い散るさまが、まるで鶴の羽ばたきのようにであったことによるというこの故事は、はやく『三宝絵』に「鶴ノ林ニ声タエニシヨリコノカタ」^{二十一}とみえるが、うたことばとして利用されるようになるのは平安も大分くだってからのようで、十一世紀中葉成立の『入道右大臣集』(藤原頼宗)に、つぎのうたがある。

安楽行品

てふとなる人のゆめだにあるものをつるのはやしのをりまで

やみし(九二)

『新編国歌大観 CD-ROM版 ver.2』にとられているかぎりではもつともはやい。当該歌は「法華経廿八品歌」とあるうちの一首で、法華経とのかかわりで錬成されたことばと判断できる。

もつともこのうたことばについては、『栄花物語』巻第三十に、藤原道長の葬送の際に、「煙絶え雪降りしける鳥野辺は鶴の林の心地こそすれ」と僧忠命が詠んだのを、藤原公任が初句は「薪尽き」がまさると評し^{二十二}、その形で『後拾遺和歌集』にとられている。

入道前太政大臣の葬送の朝に、人くまかり帰るに、雪

の降りて侍りければ、よみ侍りける

薪尽き雪降りしける鳥野辺は鶴の林の心地こそすれ

(哀傷・五四四) ^{二二三}

この挿話が事実であれば、道長薨去は永寿四(一〇二七)年のことであるから、詠作年代はこちらが先行するかもしれない。

もつとも『入道右大臣集』は、具体的な年季を記さない集ではあるものの、「道命あざり、はじめのはなをおこすとて」(六三番歌詞書)と寛仁四(一〇二〇)年に没した道命の名がみえること、あるいは「三条院御時」(三番歌詞書)と、寛仁元(一〇二七)年の崩御した三条天皇在世時であることをしめす詞書があるから、十一世紀もはやい時分のうたが収載されているふしがある。

また「閏四月」(七番歌詞書)とあるが、この閏四月は、「入道右大臣」こと、藤原頼宗の生没年を考慮すれば、寛仁二(一〇一八)年か、長暦元(一〇三七)年のことであろう^{二三四}が、さきの二例などから案ずるに、おそらくは前者と推測でき、頼宗青年期のうたを収集した歌集と推定できる。

すると、やはり『栄花物語』の挿話よりも、当該例の方が若干先行する可能性がたかいが、いずれにせよ、十一世紀前半に成立したうたことばとおほしい。

そして、当該歌は中世以降『奥儀抄』中、『和歌童蒙抄』第三・地儀部などの歌論書にもとられ、うたことばとして定着している^{二三五}が、釈迦入滅の際の沙羅双樹のことをさすことから明白なとおり、これはまったく想像の景をよんだものである。

歌語として定着しつつも、現実に存在する竹林や星空、あるい

は雲林院とかかわって造成されたうたことばよりも、この「鶴の林」はいっそうに観念的な度合いが濃厚というべきで、実体としての〈はやし〉がほとんど参与しないことはまちがいない。

「鶴の林」という故事を、うたことばとして和歌にとりこむことに意識があるのであって、それが〈はやし〉であるかどうかには、あまり力点はないと判断できる。

やはり、〈もり〉と同様にうたことば・うたまくらという観念のなかで、〈はやし〉は詠まれる場合が多いと考えていいだろう。

三 『平家物語』の〈はやし〉

さて、散文に目をむけると、中古文学からのながれ^{二二六}を引きついで、「出家する」「遁世する」の意としての、「山林にまじはる」という成句、およびその類句が、たとえば『方丈記』に「世ヲ遁レテ山林ニ交ハルハ、心ヲ修メテ道ヲ行ハムトナリ」^{二二七}などとあるように、使用法としてすくなくない。

この「山林」の中世期における辞書的説明としては、たとえば『日葡辞書』に「山の森林、竹林、あるいは、茂み」^{二二八}としかないのであるが、作品例としては、前述の意での使用がかなりの比重を占めていることは留意したい。

同時に、そういった譬喩的な用法でない、実体的な〈はやし〉の用例が、それほど多彩ではないことも確認したい。

すこしふるい例からとりあげれば、『栄花物語』では、小学館『古語大辞典』②の譬喩としてもちいられた「ことばのはやし」、あ

るいは歌語である「くものはやし」「つるのはやし」のような例をのぞけば、「山はやしにゐて経をよみをこなひをす」「た、出家して山はやしにいりぬ」(巻第八)^{二十九}、などであるのが目につく。

ほかにも『撰集抄』に「げに、あるにもあらぬ夢の世に、はかなくあだなる身に思を留て、山林にも籠やらで、名利の心もはれざんめるに」^{三十}とあり、また『徒然草』にも「その器物、昔の人に及ばず、山林に入りても、飢を助け、嵐を防くよすががなく」^{三十一}のような類例がある。

あるいは注釈書^{三十二}をはじめ指摘はないが、半井本『保元物語』にも近似の例がある。

……母儀ガ具シ、又、乳母ガツレテ、遠国へ逃失セ、山林ニ交リタランニハ、穴ガチニ尋出ニ不レ及。……

傍線を附した「山林ニ交リタラン」についても、文字どおり山野に隠れたと解するよりも、「出家した」の意に介した方が、前掲の『方丈記』の例や、つぎの『曾我物語』の例にてらしても妥当だろう。

されば、此度、御狩よりもかへりなば、出家を遂げ、……花山法皇だにも、萬乗の位をさりて、山林にまじはりたまふぞかし。^{三十三}

花山天皇の出家を「山林にまじはりたまふ」といった例で、『保元』についてもこれに準じて考えていいとおもう。

なお『曾我物語』でも、「雲林」「竹林の七賢」のような固有名詞や、氏の名としての「林」をのぞけば、基本的に右の用法でもちいられている。『義経記』のように、人名をふくめた固有名詞

以外には例のない作品もあり、(はやし)の用例がそれほど顕著でないなかで、この成句の比重のおもさをしめしていよう。

もちろん『保元物語』の「何ナル山林ニテモ死ヌベカリツレ共」^{三十四}や、『平治物語』の、「かひなき命たすからんとて、山林へぞ逃籠候はんずれ」^{三十五}というような実体的な、逃亡地として(はやし)も軍記物語には例がある。しかし、おそらくは実際の戦場にそのような地形は相当数あつたはずなのに、それに比して、こういった例はそれほど顕著ではない。

その一様を、龍谷本『平家物語』^{三十六}のように「林」という漢字自体はある程度見出すことのできる作品でみていこう。

そのうちわけは、「雲林院(二例)」「竹林精舎」「上林院」「双林寺」「花林院」のように建物のなまえにふくまれる例、「林」「ぐみの木林(二例)」「ひの(日笠)宮林(二例)」「駒の林」のように地名、または「林池道」のようにそれに準ずる語にふくまれる例、あるいは「林」氏(二例)や、近衛の意である「羽林(二例)」というように、固有名詞中の使用例だけで過半に達してしまう。

これらの例をばいいてみると、半井本『保元物語』、『曾我物語』とおなじように「山林にまじはり」が一例あり、それに近似した例として「山林流浪の行者」といういいまわしがあるほかは、古典の引用や故事をふまえての「林塘」「竹林(竹林の七賢)」「戈林釣渚」などの語彙がならぶ。

「白氏文集」を原拠とし、直接は『和漢朗詠集』によるという「林間煖酒、焼紅葉」^{三十七}や、『呂氏春秋』をふまえての「林をやってかる時は、おほくのけだものうといへども、明年に獣なし

云々」^{三十八}などもこのたぐいとなる。

以上の例をはずして、のこされた「林」をあげると、敗走中の木曾義仲が天津で今井兼平と主従の再会をする場合に「義仲がせいは敵にをしへだてられ、山林にはせち^{三十九}」て、此邊にもあるらんぞ云々」^{三十九}として、木曾の敗残兵が逃げこむという、『保元物語』や『平治物語』にひとしい例と、高野山の風景を叙した例として「花の色は林霧のそこにはころび」^{四十}とがあるにすぎない。

しかも後者は、実景とみるのは無理な例である。

高野山は帝城を避て二百里、京里をはなれて無人聲、青嵐梢をならして、夕日の影しづかなり。八葉の嶺、八の谷、まことに心もすみぬべし。花の色は林霧のそこにはころび、鈴のをとほ尾上の雲にひゞけり。瓦に松おひ、墻に苔むして、星霜久しくおほえたり。

漢文調にととのつた叙景文中の例で、具体性にはとほしい。たとえば傍線部について『白氏文集』からの引用も指摘されている^{四十一}ように、全体的に修飾的な美文のなかに、たまたま「林霧」ということばがちいられたにすぎないだろう。

あるいは、問題となる波線部についても『新撰朗詠集』下・山寺部に「花色春深林霧底」^{四十二}という類似の文句があるから、ここからの引用である可能性がたかい。そうであれば、これも引用、故事の一斑となる。

すると『平家物語』では、義仲の敗残兵が逃げこむ場所として登場する「山林」が唯一具体的で、機能的な〈はやし〉の例とみるほかはないようで、漢字「林」の数量と比して、そこに語彙と

しての重要性はほとんどみいだすことができない。

四 『今昔物語集』の〈はやし〉

このような用例の趨勢のなか、〈はやし〉ということばが、ある程度固定的な用法でもちいられている作品として、『今昔物語集』をあげることができる。

もちろん、「長ク本寺ヲ出デ、山林ニ交テ修行ヲシテ」^{四十三}というような、従前にひとしい用例もあるのだが、そうではない一群があることを、本集には指摘できる。

具体的に説話をみていけば、巻第二十七の「被呼姓名射野猪語第三十四」^{四十四}は、地元で猟を生業としている兄と、都ではたらき、まれに地元に戻還する弟の話である。

この話で兄は「九月ノ下ツ暗ノ頃」という暗がりの時分、「大キナル林ノ当リヲ過ケル」時に、その「林ノ中」から、「辛ビタル声ノ気色異ナル」という不思議な声がかきこえ、その声が彼の「姓名ヲ呼」ぶ。これが兄の身に「夜来」、つまりは夜毎に起こる。

実は、「辛ビタル声」を出していたのは野猪であり、ひとを化かしていたのであるが、この顛末がしられるのは、弟が機知をはたらかせて矢を射かけ、「林ノ中」にわけいつてその死骸を確認したためである。つまり、「林ノ中」にわけいるまえは、この声は不気味で不思議なものであり、「糸希有ナル事」といえる。

「九月ノ下ツ」、つまりは九月の下旬であるから、新暦でいえば、十月の末から十一月初旬ころで、日はかなりみじかくなる時分

ある。その季節の「夜来」に「林ノ中」から不気味なこえがきこえてくる。ここに通常の世界とはちがう、逢魔ヶ時のような情景をみいだすことは決して不当ではないだろう。

また、巻第十三「修行僧義睿値大峰持経仙事第二」^{四十五}では、つぎのように「はやし」が登場する。本段は、題名のとおり義睿という修行僧の話だが、この義睿が熊野にいたって十数日も道に迷って難渋し、「本尊二人間ニ出ム事」、つまりは、人里に出られないことを「祈請」する。そのはてにみえてきたのが「地直キ林」であり、その「はやし」のなかには非常に立派な僧坊があり、庭には「諸ノ花」が咲きほこっている。

さらにこの僧坊のぬしである聖は「年僅二十許」にみえながら、じつに八十年もの歳月をすごしており、時間の流れが通常の世界とことなっていることが明示されている。

またこの聖につかえているのは天界の童子であり、夜になると馬頭、牛頭などの「異類」がこの僧坊には押しかけてきて、説法をきくとの説明もある。つまり、この空間にかかわるひとびとは、主人公である義睿をのぞけば普通の人間ではないのであり、だからこそ、「異類」たちは義睿を「人間ノ氣有輩」として排除しようとする。

義睿が仏の祈請することによってたどりついたこの不可思議な世界が、「地直キ林」のなかにあることは、直接には出典元である『法華験記』巻上・第十一に「平正なる林に到りぬ」^{四十六}とあるのによるのだし、おなじく『法華験記』によるとおぼしき『発心集』巻第四でも、「林ノ中ニ一ノ庵アリ」^{四十七}とする。

しかし、前述の巻第二十七第三十四の舞台も「はやし」であったことを考慮したとき、『今昔物語集』における用法として、おもしろく受けとめられてよいと思う。

どちらの話でももちろん、その不可思議さには程度の差はあるが「はやし」は日常とはことなる空間として描写されているとみてよいだろう。前者は野猪という微力な畜生の空間であったがゆえに、あっさり人間と機知と弓矢によって日常に組みこまれてしまう。しかし根本的にはおなじ性質の空間と考えてよいのではないだろうか。

この傾向を、さらにほかに段を追っていくことで確認する。

巻第二「婢依迦旃延教化生天報恩語第七」^{四十八}では、主人の勘気をこうむった婢が死にのぞむときに、尊者である迦旃延の教えをうけて、「仏ヲ觀ジ、悪心ヲ不發」で亡くなる。この悠然とした死に怒気を発した主人が婢のなきがらすてる場所が「寒林ノ中」である。またこの「寒林」は、天人に生まれ変わった婢が、かつての自分のなきがら供養するために、「香ヲ焼キ花ヲ散」す場所でもある。

ここでも、「寒林」はなきがらすてる不浄な場所であると同時に、天人となった婢が来臨する場所として描写されており、やはり日常とはことなる空間とみとめられる。

また同「天竺神為鳩留長者降甘露語第二十七」^{四十九}でも、主人公である鳩留とその一行が商売のために遠国に向くのだが、途中で食糧がなくなり、途方にくれることになり、そこで発見するのが「山辺ノ盛ナル林」である。そして人里と違って近づいたそ

の〈はやし〉は、実際には「神ノ社」で、この神の助けによって一行は救われることになる。ここでもやはり奇縁のある場所は〈はやし〉であることは無視できないだろう。

巻第五「天竺牧羊人入穴不出成石語第三十二」^{五十}でも、数百頭の牛を飼っている牛飼が、「林中ニ至ル」と、つねに一頭の牛が群れをはなれてどこかにいってしまふ、と話を起こす。

この牛は、〈はやし〉をぬけて、「石ノ穴」にはいり、その「石ノ穴」のなかは、「目出タキ花盛りニ開ケテ、果物ミタリ」という不思議な空間で、ここで「悪鬼」の用意した果物の食べてしまった牛飼は巨人となつて、最終的には石と化してしまふ。

この段の場合、直接的に不思議な世界への入口は「石ノ穴」つまりは洞窟であることはうたがいがいが、その洞窟にいたる中継地として〈はやし〉が描写されていることは、やはり注視しておいてよいと思う。

また、もうすこし現実的な別空間となるが、巻第六「玄奘三蔵渡天竺伝法帰來語第六」^{五十一}では、三蔵法師が「八十余人」のお供とともに、船で川をくだっていくくんだりで、「河ノ両ノ岸」が、「皆盛りナル林」である地形に出くわし、その〈はやし〉のなかから、数十もの海賊の船があらわれ、一行はおそわれてしまふ。

ここでも賊は〈はやし〉のなかから出てくる。この例は簡単にいえば待ち伏せで、それ自体は『平家物語』にもある。

五郎は生田森にありけるが、是をみてよひびいてひやうふつとある。^{五十二}

〈もり〉に武士がかくれていたという例で、『今昔』とのあいだ

におおきな差異はない。常識的に考えても、待ち伏せをするなら〈はやし〉や〈もり〉は適した場所である。

しかし、あくまでも『今昔物語集』という作品レベルでの〈はやし〉の用法を考えれば、やはり〈はやし〉という場所の、すくなくともその一群が不可思議な空間、ないしはその入口・中継地として登場していることを重視してよいのではないか。

あるいは、巻第十四「越後国々寺僧為猿写法花語第六」^{五十三}で、法華経を僧侶に書写してもらうかわりに、「暑預」や果物をもつてくるという、帰依した猿のすみかであり、その死地が「山林」だが、これも猿のすみかとして「山林」は自然な場所、これ単独ではとくに問題となるような例ではない。

しかし、この段に登場するのは法華経に帰依した異能の猿で、単純に猿のすみかなので「山林」と片づけてしまふのはほかの用例からおして得策ではないだろう。既述の例にひきつけておきえておきたい。

さて、すでにふれたように、基本的に〈はやし〉ということはそのものには、〈もり〉や〈こたち〉などとおなじく、木々が鬱蒼と繁茂した場所、という以上の意味はとくにないようである。

しかし、こと『今昔物語集』においては、〈はやし〉はかなりの頻度で日常とはことなる世界とかかわって使用されている。本集は個人の創作物というよりは、複数の出典を集成した編纂物だが、一方で「文体の統一性」をはじめとした綿密な構成意図のあることから、「集団による編集とするよりも個人の編集とする可能性が高く、たとえ集団であっても、それはごく少数人数よるもの

であったと推定される」^{五十四}という評価のあることを考慮した場合、あるいは積極的な意図がはたらいっているとも考えうる。

もちろん編者の意図というレベルになると、稿者には不明というほかはないが、用例から還元して、『今昔物語集』の〈はやし〉には、非日常的世界の性格が、かなり濃厚にあらわれていると指摘できる。

以上、あくまで点描の結果ではあるが、確認してきた〈はやし〉の様相は、辞書レベルでは〈もり〉とほぼ同義で、木々が鬱蒼とした場所という以上の意味はないことがみとめられた。一方、作品レベルの用例としては、和歌においては当然のことながら、うたことは・うたまくらとしての使用例にかたより、散文作品では具体的な実景としての例もあるものの、「山林にまじはる」のような譬喩的用法の方が、むしろ顕著にもちいられている。

そのなかで、『今昔物語集』での使用例群は、かなり明快に日常とはことなる世界を表出する〈はやし〉を指摘でき、特異な様相をしめしている。

五 近世社会における〈林〉

前章までの結論を受けて、ここからは近世文学における〈はやし〉の様相を追っていく。しかし、文学における〈はやし〉と限定してみたところで、近世文学と社会様相は切っても切れるものではない。一般に近世は町人の文化だといわれる。近世文学史前期にある浮世草子というジャンルはまさに町人の生活を描いた作

品群であるし、浮世草子と同時代に花ひらいた近松門左衛門の浄瑠璃も町人を主人公とする。また、時代がくだって近世中後期になると、洒落本や滑稽本、人情本が登場する。これら町人の実生活を写實的に描いた上で生まれるドラマを描きだした作品群は、まさに〈俗〉文学の最骨頂である。

これらの作品を書いた作者たちも町人である。そしてこれらの〈俗〉作品と同時に幕府要人である武士や堂上の公家たちの文学も町人の目に触れることが、出版という文化を通して可能となったのが近世という時代である。

前置きが長くなったが、以上のように様々な生活レベルの人間の様相が描写されるようになった結果、文学と庶民の実生活の垣根が非常に低くなったのである。この事実を受けて、まず近世社会における〈林〉の様相を簡単に確認しておきたい。

豊臣秀吉の兵農分離令、徳川家康の一国一城令など、戦国時代末期から江戸時代初期にかけて日本の町並みに大きな転換期が訪れる。幕府政権下における城郭や政庁の建造、人口増加による住宅建築などが特に江戸・大坂・名古屋・仙台・金沢等大小の新興都市の整備へとつながった。また、一六〇六年の江戸城造営、一六五七年の振り袖火事なども要因となり、それまで無尺視されてきた用材が枯渇してしまう。幕府は植林を制度として整え、地方に指示を出した。幕府直轄の管理地が御林とされ、人工的に林が造られることが推進された。林業ということができたのは明治時代になってのことであるが^{五十五}ここに近世林業史の始まりを見出すことができるのである^{五十六}。

こういった近世初期の様相を鑑みると、「林」というものが人々の生活と密接な関係を持ってきたことがうかがえるのである。

六 類書・地方書における〈はやし〉

ここでは近世期の類書及び地方書（農政の手引き）における〈はやし〉について確認したい。

近世期における著名な類書として、寺島良安の『和漢三才図会』が挙げられる。一七二二年頃編まれたこの事典は、中国の『三才図会』^{五十七}にヒントを得て作成されたものである。『和漢三才図会』には以下のようにある。

林 はやしリン 五十九 音臨 林 和名波也之

森 訓三毛里 俗用二杜ノ字ヲ甚々非也

説文云平地ニ在ニ草木一曰レ林ト又云ク野外ヲ曰レ林ト又云草ヲ曰レ薄 無良ニ調久佐木ヲ曰レ林ト

月清 紅葉ふく嵐に付て聞ゆ也林のおくのさほしかの声

森 ハ音 衆木ノ貌也按ニ森林有ニ少異 野外ニ有ニ草木 平平 者林

也 一處ニ在ニ衆木一叢叢者 ハ音 森也 古毛留ト云留言也 森林ノ字形 能ク合レフ訓ニ 今稱スル者多 ハ音 是レ神處也如ニ 糺 森生田ノ森ノ之類 原マデ 而社

利ト毛 續日本紀社女ヲ為 モリメ 毛理賣ト是也 後人誤社字作社訓毛里ト平

「林」という語で立項されているが、内容の大部分は「森」との比較、あるいは「森」そのものについての言及である（『和漢三才図会』に「森」は立項されていない）。

第一章において『和名類聚抄』の記述が紹介されたが、『和漢

三才図会』もこれをうけてか「和名波也之」とあり、また『説文』をひいて「平地ニ在ニ草木一曰レ林ト」とある。『和漢三才図会』は挿絵入りの百科事典であるが、ご丁寧にも「森」の絵はこんもりと山型に、「林」の絵は平地に木が乱立する様として描かれており、『説文』を忠実に視覚化している。「森林有ニ少異」以下、良安独自の解釈に基づく文面においても林は平地である、という理解である。「森」は木が一箇所にとくさんあるところで「叢叢」と表現し、「林」は草木があるところで「平平」としているというのである。

しかし、後に実作品による「林」の用例を紹介するが、いずれも平地に限った部分を林と呼んでいるわけではないため、あくまで『和漢三才図会』のこの部分の描写は、和漢の古辞書の内容を踏襲したまでというに留まるであろう。

もう一つ江戸中期に成立した著名な類書に、山岡浚明編纂の『類聚名物考』がある^{六十}。この書における「林」の項目にも、和名抄よりという注を添えた上で「説文云、平地有ニ藜木一曰レ林」とあり、「平地」という解釈が実景にそくしているかは別として、ひとまず『説文』を紹介するのである。ちなみに「森」の項では森を含む歌語を紹介するにとどまり、実景としての森が如何様なものであったのかなどは言及されない。

他に「林」に附随する事柄として「弱木林」「鶴林」「三宮林」が立項されている。「鶴林」については二章で紹介があった通りだが、本書にも「釋教部 死卒條」との説明がある。「三宮林」については『太平記』巻二本文を引用することで、三宮林におけ

る逸話を紹介している。「弱木林」を「しもとほら」と訓ませることは『日本書紀』によるものとし、本書にもその本文が引用されているが、山岡俊明自身はこの訓みに対して疑問を抱いており、以下のように述べる。

この訓必しも當ともいふへからず。弱木ハしもとなれハ、處のまゝにはやしと訓ても故なきにあらず。はらと訓しハ義訓にて原野の意にかよハせるなり（三字にてシモトとのみ訓しにても有るへし）。

「林」を「はら」と訓ませることは義訓^{六十一}だとし、「林」＝「原野」と考察している。おそらく『説文』に「平地」とある説を踏襲した上でこの訓が与えられたと山岡は考えたのであろう。

では実務書においてはどのように記載されているのか。明治政府にも大きな影響を与えた大岡久敬著『地方凡例録』（一七九三年）には以下のようにある^{六十二}。

森と云ハ寺社境内又ハ家居屋敷にても、木を植立^{ウヘタテハンモ}繁茂したる処を森と云、林と云ハ山・河原・野手・原地等に木を植立^{ハラチ}茂りたるを林と唱ふ、森ハ多分寺社免地の屋敷反別の内に籠^{コモ}るゆへ、別段年貢等を出さず〔後略〕

「森」と「林」で生えている場所が異なるという見解は『和漢三才図会』において紹介された『説文』と同様だが、その場所が異なっている。「森」とは寺、神社、民家にあるもの、「林」は山や原野、平地など公共の自然とされているのである。「森」には年貢がかからず、「林」にはかかる。『和漢三才図会』において書かれている良安自身の解説に「今稱^{イマ}森^ノ者多^クハ是^レ神處也如^ニ糺^ノ森^ノ

生田ノ森^ノ之類^ニ而社^ノ祠^ノト^モとあることから、近世期の実社会における（もり）（はやし）の認識は、『説文』等近世期には既に古典と認識されていた文献の記述と大幅な異なりがあるのである。これをこのまま文学作品に還元することはできないが、近世の人々の（はやし）認識の一例として留意する必要がある。

事典と現実社会における認識のズレは決して小さくない。

七 韻文における（はやし）

事典・実務書における（はやし）の記述を確認してきたが、いわゆる文学作品においてはどのように（はやし）が登場するのか。その一端として高瀬梅盛の『類船集』を確認したい^{六十三}。『類船集』の「林」の項目には以下のようにある^{六十四}。

林 片山 鳥のねぐら 鐘の音 仏の入滅 祇園 酒旗
酒をあたゝむる 能 泉

花の林。竹の林。星の林。筆の林。詞の林。雲の林。いつれも多きをはやしと云。但雲の林ハ雲林院といふ所あり。又六角堂を雲林寺といふ。自古雲林遠^ニル市朝^ニとも言。

また、逆に「林」が付合となる語として「寄木、梟、深、寺、鷺」が挙げられている。B論文において『類船集』における「森」の付合を確認したが^{六十五}、共通するのはわずかに「深」「鷺」のみであり、連句において「森」と「林」は明確に区別されているといつてよい。また、「森」における付合に神社を連想させる語が複数あったのに対し、この「林」の付合には寺や仏教を連想さ

せるものが多々ある。近世初期には、〈森と神社〉〈林と寺〉という連想が既に定着していたといえる^{六十六}。それ以外には『万葉集』から引き継がれている、物の多さを示す「林」や白楽天の漢詩とあった、中世までに築かれてきた伝統の中に存在する「林」が付合となつてゐる。また、「輪廻」の付合として「山林に入」があることにも注意が必要である。後述するが、散文においては、中世までの作品に多数確認された〈出家する〉の意での〈山林に入る〉は使用例がほとんど見受けられない。『類船集』自体近世最初期の連句辞典だということに留意する必要があるが、それでも連句の世界ではまだ「山林」に古来よりの意味用法が生かされていたのである。

以上のように、俳諧の世界においては前代までの意味を逸脱しない範囲での〈はやし〉が使用され、大きな意義転換は起こらないようである。

では俳諧以外の韻文においても同様のことが言えるであろうか。仏教との関わりから、禅僧の漢詩を確認したい。

鎌倉期から室町期にかけて五山僧徒が築き上げた五山文学には大変な数の作品が残されている。その断片を見るだけでも、「林」という語が頻出することが確認される（当然とも言えるが「森」や「杜」はほぼ皆無である）。その中には「余生儘向山林、除却山林何所之。」（焦堅藁）^{六十七}のような、「林（山林）」を求道者の目的地と詠うものも少なくない。「叢林」は中国で「僧所聚処」を指す^{六十八}。また五山僧はいずれも中国語に長けていたが、日本においても「叢林」が「禅の世界」という意味で使用される通り^{六十九}、

「林」とはすなわち「禅」である。特に五山文学は詩禅一味論が展開される文学である。「林」が象徴として使用されることに疑問はない。

しかしながら近世期の禅僧の漢詩はやや趣が異なってくる。「満林秋色画図開」（売茶翁）、「林野蒼蒼佳氣来」（大典顕常）のように、景物として「林」を詠むものが多くなってくるのである^{七十}。

一般的に近世とは仏教の形骸化、低迷期であると解される。それに関連づけられるかどうか稿者は判断材料を持たないが、禅僧の作品世界において特別な場所・コトバであった〈林〉が、景物としての〈林〉を表すことに比重が移りつつあることは疑いない。〈はやし〉に生きる僧の中では、近世に入り、それまでの認識とは若干の差異を感じさせるようになってくるのである。

八 散文における〈はやし〉

一方の散文において〈はやし〉はどのような記述がなされてきたのかをこの章で確認していきたい。しかしながら近世期の散文における逐一の用例を確認することは出版物の点数の多さから事実上不可能である。よって今回は読本^{七十一}と呼ばれるジャンルに限定する。読本は様々な要素を物語の典拠として盛り込むことが多いために学術的になりうるが、典拠作品や用字法から作家の個性がもっとも顕著に探り出せると考えられる。また、雅俗折衷体の本文は明治以降の文学作品とも繋がってくる^{七十二}。前後の時代とのつながりを重視し、以上のような観点から読本に限定した次第で

ある。

八——上田秋成『雨月物語』における〈はやし〉

前期読本と呼ばれる作品群の代表作である上田秋成『雨月物語』は一七七六年に刊行された、全五巻九編から成る怪異小説である。

『雨月物語』中、〈はやし〉が登場する作品は「白峯」「仏法僧」「吉備津の釜」の三作品である^{七十二}。

「白峯」は、讃岐の真尾坂の林に旅寝をしていた西行法師が白峰にて崇徳院の墓を詣でたところ、崇徳院の怨霊と出会い、論争をかわすという内容である。白峰は「松柏は奥ふかく茂りあひひて、^{あかきも たなびく}青雲の軽靡日すら小雨そほふるがごとし。児が嶽といふ峻しき^{みね うしろ}嶽、背に聳だちて、千仞の谷底より雲霧おひのほれば、咫尺をも^{おほつかなき}鬱悒ここの地せらる。」という鬱蒼とした場所である。この山を登り詰めると崇徳院の墓があり、そこで成仏できず怨霊となつている崇徳院に出会うのである。崇徳院の墓は詣でる人もなく、「貌^{こや}姑射の山の瓊^{たま}の林に禁^あさせ給ふ」ていた讓位頃とは全く異なる様子に西行は悲嘆する。この「瓊^{たま}の林」とは中国の故事より転じて宮殿の意味であるが、同時に「貌^{はこや}姑射の山」に対する縁語でもあるという^{七十三}。固有名詞である〈瓊林苑〉より派生させた言葉であるが、植物としての〈林〉の意味をも持たせているのである。そして瓊林に対し白峰が鬱蒼とした〈林〉であることが、以下のように示されている。

日没^{いり}しほどに、山深き夜のさま常^{ただ}ならね、石^{いし}の床木葉^{ゆかこのは}の衾^{ふすま}

と 寒く、神清骨冷^{しんすみほねひえ}て、物とはなしに凄^{すさま}しきこちせらる。
月^{つき}は出^いでしかど、茂^{しげ}きが林^{もり}は影^{かげ}をもらさねば、あやなき闇^{やみ}に
うらぶれて〔後略〕

「林」を「モト」と読ませることは古辞書訓点語共に例がなく、秋成独自の感性によるものだと考えられる。「しげきかも」とは祝詞・六月晦大祓にある「繁木カ本」より転用した語^{七十四}で、これを「茂木が林」としたことで、本来の意味を離れて白峰が密林であることを表したのである。ちなみに白峰は「かの山に登る」と本文中にあるように山である。第六章で紹介した『説文』にある「林は平地である」という記述にはあてはまらないことがわかる。

「仏法僧」は高野山の林で野宿していた夢然と作之治が、仏法僧という名前の鳥の鳴き声を聞く。すると豊臣秀次、里村紹巴らの亡霊が林の中に現れ宴会を始める。宴会に同席することとなつてしまった夢然・作之治はあやうく修羅道へ連れて行かれそうになるところを逃れるが、下山した後も秀次の悪逆塚を思い出しては「物凄まじくありける」と人に語ったことを記したという展開である。

夢然・作之治が野宿していた場所は以下のように記述される。
方^{かた}五十町に開^{ひら}きて、あやしげなる林も見えず。小石^{こいし}だも掃^{はら}ひ
し福田^{ふくだ}ながら、さすがにこは寺院^{だら}遠く、陀羅尼^{だらに}鈴錫^{れいしやく}の音^{こゑ}も
聞^きえず。木立^{こだち}は雲をしのぎて茂^{しほ}さび、道^{みち}に界^{さか}ふ水の音^{こゑ}ほそほ
そと清^{すみ}わたりて物がなしき。

山頂を切り開いた美しい聖域であるが、寺から遠いため経を誦

む声も聞こえず、近くの木立は雲をしのぐほど高くまで伸びており、さびしい様子である。鳴き声が「ブッパン（仏法）」と聞こえる鳥のことを仏法僧と呼ぶが、この鳥の鳴き声をきっかけとして林の中に「思ひがけずも遠く寺院の方より、前を追ふ声の巖敷聞えて、やや近づきたり」と、亡霊に会うという怪異が訪れたのである。

「吉備津の釜」は正太郎という男が、猷身のな妻・磯良を捨てて袖という女と一緒に、袖の従弟・彦六の隣家で暮らし始める。ところが袖が鬼化に憑かれたように苦しみ、死んでしまう。袖の墓参りに行くと、奉公先の奥方の代わりに墓参りに来たという女性に出会う。女性の案内で「をぐらき林の裏」にある女性の奉公先に行く。すると「めづらしくもあひ見奉るものかな。つらき報ひの程しらせまあらん」と顔を見せた奥方とは、捨ててきた妻・磯良であった。磯良は「顔の色いと青ざめて、たゆみ眼すさましく、我を指たる手の青くほそりたる」というすさまじい容貌となっていたのである。氣を失った正太郎が目覚めたのは以前からあった荒野の三昧堂であったという。「裏」とはうち、中の意であるので^{七十五}、磯良の計略にはまった地は林の中であったといえる^{七十六}。

これら三つの話に共通することは、〈林〉の中で怪異が起こるという点である。B論文において〈もりで起こる怪異〉が描かれた作品を紹介したが、これらの話における〈林〉の位置付けは〈もり〉と何ら変わらない。しかし『雨月物語』に〈もり〉は登場せず、〈林〉が物語の舞台となっているのである。この理由と

してまず、先に挙げた韻文の場合と同様〈もり〉は神社へ、〈はやし〉は寺（仏教）への接近が見受けられるということが挙げられるであろう。

「白峯」の主人公は西行法師と崇徳院であり、西行が崇徳院をなぐさめるために読経していたところへ亡霊が現れた。

「仏法僧」は寺の林で野宿中に仏法僧の声が聞こえたところで亡霊が近づいてきたのである。

「吉備津の釜」はどちらかというと神道的な要素が関わる話であるが^{七十七}、磯良の計略にはまって気絶した正太郎が目覚めた場所が三昧堂（墓地、火葬場、墓地にある堂を指す）であったことより、場所設定を〈はやし〉とすることに必然性が出てくる。

ところで、「仏法僧」は同じく秋成作品である『春雨物語』所収の「目ひとつの神」と構成が極めて似通っている。どちらも主人公が野宿しているとふしぎな存在（「仏法僧」では亡霊、「目ひとつの神」では神及び百鬼夜行）が現れて、そのふしぎな存在と会話を交わすことになるという展開であるが、「目ひとつの神」の舞台は〈もり〉である。主人公の男はもりの中にある神社で野宿している際に怪異と遭遇するのである。神と出会う場は〈もり〉であって〈はやし〉でない。どちらにも怪異との出会いの場所、境界としての意味を持たせることができようが、同時に〈もり〉と〈はやし〉の間にある確実な差も見出すことができるのである。

以上のように、上田秋成の作品においては〈もり〉と〈はやし〉に明確な使い分けがなされているのである。秋成自身国学者であ

り、かつ和歌や俳句をたしなんだということが、韻文の世界で成立した〈もり〉と〈はやし〉がそれぞれ神社と寺に付随する空間であるという認識を散文にも応用した所以であろう。よって『雨月物語』における〈はやし〉という場所が歌語を通して歴史を帯びた舞台装置となり、物語の多角性を深める一因となったのである。

八―二 曲亭馬琴『南総里見八犬伝』における〈はやし〉

曲亭馬琴『南総里見八犬伝』（以下『八犬伝』と略する）は、一八一四年から一八四二年という、実に二八年もの歳月をかけて執筆された長編小説である。中国の『水滸伝』を下地に、日本の『里見軍記』、『書言字考』に載る〈数尽くし〉などを織り交せて構想されている。この作品において、「もり」は頻出するものの、「はやし」が登場する場面は決して多くない^{七十八}。しかしながら馬琴の用字法に注目すると、〈はやし〉の多様性がみえてくる。

まず、『八犬伝』において「林」という文字が単体で使用される例は一箇所のみであり、ルビは「しげき」と振られる（一、二九二頁）。『八犬伝』はルビにも確実に馬琴自身の意志が働いており^{七十九}、「林」とはすなわち「茂木」^{しげき}、木の集合体であるという認識を馬琴が持っていたことがわかる。同時に、作品に多数散見される語彙「茂林」に注目したい。これには「もり」とルビが振られる（「もりん」も一例ある）。字義通りに解釈すれば、林が茂

ると「もり」になるということである。よって、木↓はやし↓もりの順に木の量が多くなるといふ概念に基づいた上での用字法だといえる^{八十}。

ただし、その他の箇所を確認すると、すべてがそのような方式で解決できるわけではない。「茂林」に関しては「森」と置き換えるかたちで固有名詞でも使用されており、一概に木の量と直結させては考えられない。例えば「鈴森」は「鈴茂林」と表記される場合もある。写本などで近い位置に同じ文字が並ぶことを嫌い、あえて仮名遣いを変えることはままあるが、『八犬伝』にこれは該当しない。この使い分けに明確な根拠は見出せないため、「茂林」という音を借用するかたちでこの表記を採用したと考えられる。

関連事項を確認できる語彙に「しもとほら」がある。六章で触れた通り、『日本書紀』を出典とする語であるが、『日本書紀』では「茂林」^{しもとほら}「弱木林」^{しもとほら}と表記され^{八十一}、その意は「若い木立（弱い枝木）が生い茂る林」である。馬琴はこの語に対し、「林原」^{しもとほら}（一、三一頁、六、一五八頁、一一、一三九頁）、「林樹原」^{しもとほら}（六、六五頁）、「疎林」^{しもとほら}（松浦佐用媛石魂録第九）という漢字を当てている^{八十二}。「新駅仮名町の間には、左右に水田あり、林原あり。路一条にて広からねば、大軍の進退は、必ず不便なるべきに」（十一、一三九頁）「去向に連る椏樹の蔭」（十一、一四〇頁）などと表現されることから、原義にとらわれず、「木立がうつそうと茂る場所」というように使用されると読み取れる^{八十三}。また、『松浦佐用媛石魂録』で「しもとほら」とルビが付された「疎林」は「八

大伝』では「おちのはやし／ソリン」とルビが付される（四、四二〇頁）。「馬琴の字訓の直接の依拠を述べることは単純ではない」^{八十四}のだが、表記レベル、意味レベル等段階で分けて考えると、古典に全ての典拠を求められるとは一概に言えないであろう。このような言語採択の中で、〈はやし〉が複数の情景描写に利用されていたのである。

「森」の字が単体で使用されるのは「森の鳥」^{からず}（一、八二頁）、「聖護院の森」^{せうごゐん}（九、三七〇頁）のみである。「森の鳥」はおそらく連句から採用された語であろう。「森」の付合に「鴉」があり、「鴉」の付合に「森」がある^{八十五}。他に「林鳥」^{りんちゆう}が一例あるが（七、六八頁）、「林」の付合にある「鳥のねぐら」との関わりを類推することは可能である。『八犬伝』は合戦シーンを含め、五七調のリズム（和文調）で描写されている場面が多い。連歌・連句のような伝統的手法を応用した箇所が散見することに不思議はない。

その他「林」を「はやし」と訓ませる箇所は固有名詞を除き、「火退林」^{ひのきはやし}（一、三〇頁。防火林と同義）のみである。また、「山林」を「はやし」と訓ませた例も一箇所存在する（四、二七五頁。泡雪奈四郎の役職を「山林管領」^{はやしあつが}とする。『八犬伝』特有の名詞だと考えられる）。これ以外にも「山林」の語彙が散見するが、固有名詞を除きいずれも「さんりん」とルビを付す。意味もそのまま「山の中の林」であり、「出家する」の意では使用されていない。これはこの作品に限ったことではなく、例えば近世初期に刊行された戯作や仏教説話でも、管見の限り用例が見出されなかった。散文の世界においては近世期までに廃れてしまった用法なのであ

ろう。付け加えて、この『八犬伝』が『水滸伝』と『里見軍記』を翻案して生成された作品であることに留意する必要がある。三章で用例を挙げたように、『平家物語』『保元物語』『平治物語』等代表的な軍記作品においても「山林」は実景的、機能的な用例、あるいは故事成句から引用された修辭としての「はやし」という用例が多数を占めていたのである。この結果は軍記の系譜に置くことも不可能ではない。『八犬伝』においても踏襲されていると考えられる。

以上のように馬琴の用字法は極めて特殊であるといえる。漢字も一般的ではない熟し方をさせ、ルビはほとんど義訓である。しかしこの法則の中においても、〈はやし〉と〈もり〉は明確にわけられているといえるであろう。ただしその用語の意味としては、ほとんどが実景描写にすぎない。このように明治期以降にも影響を及ぼした戯作において実景描写としての〈はやし〉が増加することで、西洋文化が輸入されて後、〈もり〉の文化的概念が変わっていった時点で、いよいよ〈もり〉と〈はやし〉の認識レベルに大きな差がなくなっていくのである。

以上、数項に渡り近世期の〈はやし〉の様相を確認してきた。全体と通して〈もり〉との差が明確である場合が決して少なくはないと思われる。神社や寺が観光地化した近世においても、神社と寺とはやしという図式が踏襲されていたと考えられる。

一方『八犬伝』では「はやし」は実景描写に留まり、そこに例えば境界としての役割などを見出すことは困難であった。このような混沌とした状況が、明治以降特に顕著となる〈もり〉と〈は

やし)の同一視傾向の原点ともいえるであろう。

おわりに

中世から近世までの〈はやし〉を点描的に調査し、あわせて〈もり〉との対比をおこなった結果、いくつか興味深い点が指摘できたのではないかと思う。

ひとつには、近世において神社と〈もり〉、寺と〈はやし〉がそれぞれ対として登場するという区別がみられた一方で、中世から〈もり〉〈はやし〉をほぼ同一とみなしてよい事例が散見され、近世においても韻文の世界を中心に区別のある一方で、『南総里見八犬伝』などの世界では、用語としてはともかく、機能としては大差がない。これは近現代への接続を考える際に、見逃せない点であろう。

もう一点〈はやし〉と怪異との関係についても確認しておきたい。『今昔物語集』では、用例のすべてがそうだというわけでないが、〈はやし〉が怪異とかわかるパターンがみられた。また『雨月物語』でも〈はやし〉と怪異は不可分の関係にあることがみとめられる。

その一方で秋成を基軸に考えれば―その思想的な背景はことなるとはいえ―、『春雨物語』では〈もり〉にも怪異は存在し、『雨月物語』の〈はやし〉とともに、現象面においては相対化される側面もみえかくれする。

そのような傾向は江戸以降のものかといえばかならずしもそう

ではなく、中世にその萌芽をみとめてよいと思う。たとえば『今昔物語集』では〈もり〉と怪異はかわらないが、これは〈はやし〉とのあいだの区別によるのではなく、単純に、〈もり〉の用例がないという語彙の偏在による。

逆に『平家物語』では唯一的な例であるとはいえず、鶴にすまう場所は〈もり〉であったし、くだって西鶴『懷硯』では、怪異があらわれる場所もやはり〈もり〉である^{八十五}。「林」の位置付けは〈もり〉と何ら変わらない」ということである。

〈はやし〉〈もり〉と怪異との関係は、『今昔物語集』のような例を一応よりわけておけば、近世にはいつてより濃厚なものとなるように思える。一方で、神社・寺という場所の設定を等閑に附してしまつたなら、〈はやし〉と〈もり〉とを明確に線引きすることは困難となつていくのである。

「はじめに」でもふれたように、本稿でとりあつた作品の点数は、その膨大な分母と比すればわずかなもので、これをもつて時代の表現を総括できるわけではない。

しかし、作品からことばを抽出、分析し、それを文学史的な枠取りのなかに位置づける作業は、個別的な作品の把握からはじまり、それを積みかさねていくほかはない。本稿についても、中世・近世における〈はやし〉のありかたの、あくまでも一斑をしめしたものと総括して、擧筆する。

一 中近世の〈もり〉についてはすでに見解をしめした。中世については、大野寿子・千艘秋男・野呂香・池原著「トボスとして」の〈森〉の系譜(古代中世編)―漢字文化受容を中心に―に、

- 近世については、石田仁志・大野寿子・早川芳枝・松岡著「トポスとしての〈森〉の系譜（近世近現代編）—漢字文化受容から西洋文化受容へ—」（いずれも『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第十二号・二〇一〇）に、池原、松岡がそれぞれ分担執筆した。
- なお、本文中で当該論文にふれる場合、「古代中世編」をA論文、「近世近現代編」をB論文と呼称する。
- なお本稿は「はじめに」と「おわりに」を池原と松岡が、一〜四までを池原が、五〜八までを松岡がそれぞれ分担執筆し、用字、様式等の統一は最低限にとどめた。また執筆にあたっては本研究所研究員・千艘秋男先生（東洋大学・日本文学文化学科学科教授）の指導を仰いだ。この場をお借りして謝辞をのべたい。
- 正宗敦夫編『類聚名義抄』第一巻（風間書房・一九七〇）、三八六頁。
- 中田祝夫・峯岸明編『色葉字類抄研究並びに索引本文・索引編』（風間書房・一九六四）、三〇五頁。
- 諸橋轍次編『大漢和辭典第六』（大修館書店・一九五七）、二二八頁。
- 表語文字と表意文字という用語の関係については、犬飼隆「木簡から探る和歌の起源「難波津の歌」がうたわれ書かれた時代』（笠間書院・二〇〇八）、一五三〜五五頁参照。
- 築島裕編『訓點語彙集成』第一巻／第八巻（汲古書院・二〇〇七〜〇九）による。
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄本文編』（臨川書店・一九六八）、四十五頁。
- 中田氏・小林祥次郎編『改訂新版 書言字老節用集研究並びに索引』（勉誠出版・二〇〇六）、九頁。
- 前掲一、A論文二二七〜二九頁参照。
- 築島氏『訓點語彙集成』第八巻（汲古書院・二〇〇九）、一四四頁。なお同集成によれば、「林」には「ハヤシ」「モリ」のほかに「キ」「シゲシ」「ツラヌ」「ハラ」の訓があがっており、おおかたの古辞書よりも訓が豊富である。このうち「シゲシ」は、「森然」の訓とも共通するので、このあたりにも両者の近似が指摘できると思われる。また、『落葉集』（小島幸枝編『笠間索引叢刊55 耶
- 蘇会版『落葉集総索引』笠間書院・一九七八）では、「林」の訓として「キ」「シゲミ」があり、訓点資料と傾向がかななる。
- 中田氏編『古語大辞典』（小学館・一九八三）、一三五頁。
- 佐竹昭廣ほか校注『新日本古典文学大系2 萬葉集二』（岩波書店・二〇〇〇）、四五五頁。
- 十四 佐竹氏ほか校注『新日本古典文学大系1 萬葉集一』（岩波書店・一九九九）、一四五頁。
- 十五 大野晋ほか編『岩波古語辞典 補訂版』（岩波書店・一九九〇）、一〇八七頁。
- 十六 小山弘志・佐藤健一郎校注・訳『新編日本古典文学全集59 謡曲集②』（小学館・一九九八）、二二二頁。太字処理、傍線の添附はわたくしにおこなった。以下もおなじ。
- 十七 同書二二二〜二三頁。
- 十八 同書二二二頁。
- 十九 福田秀一ほか校注『新日本古典文学大系51 中世日記紀行集』（岩波書店・一九九〇）のうち、大曾根章介・久保田淳校注『海道記』九十三頁。底本である尊経閣文庫所蔵本の表記については、江口正弘編『笠間叢書140 海道記の研究』（笠間書院・一九七九）を参照した。
- 二十 本文は、新編国歌大観編集委員会監修『新編国歌大観 CD-ROM 版 Ver.2』（角川書店、二〇〇三年）による。以下もことわらないかぎり、引用は同CD-ROMによる。
- 二十一 馬淵和夫ほか校注『新日本古典文学大系31 三宝絵 注好選』（岩波書店・一九九七）のうち、馬淵氏・小泉弘校注『三宝絵』七十四頁。
- 二十二 山中裕ほか校注・訳『新編日本古典文学全集33 栄花物語三』（小学館・一九九八）、一七一〜七二頁。
- 二十三 久保田氏・平田喜信校注『新日本古典文学大系8 後拾遺和歌集』（岩波書店・一九九四）、一七八頁。
- 二十四 内田正男編『日本暦日原典』（雄山閣・一九七五）による。
- 二十五 草野隆著『鶴の林』（久保田淳・馬場あき子編『歌ことば歌枕大辞典』（角川書店・一九九九）、五八四〜八五頁。
- 二十六 中古文学における〈はやし〉に色濃く仏教の影響のあることは、仁平道明「林のある風景―漢と和と―」（『論集平安文学第二号

『東アジアの中の平安文学』勉誠社・一九九五)に詳細な指摘がある。

二七 佐竹氏・久保田氏校注『新日本古典文学大系39 方丈記徒然草』(岩波書店・一九八九)のうち、佐竹氏校注「方丈記」二十八〜十九頁。

二八 土井忠生ほか編訳『邦訳 日葡辞書』(岩波書店・一九八〇)、五五六頁。

二九 高知大学人文学部国語史研究室編『栄花物語本文と索引 本文篇』(武蔵野書院・一九八六)、一一七頁、一二二頁。

三〇 撰集抄研究会編著『笠間注釈叢刊37 撰集抄全注釈 上巻』(笠間書院・二〇〇三)、三十九頁。

三一 前掲二十七のうち、久保田氏校注「徒然草」一三六頁。

三二 栃木孝惟ほか校注『新日本古典文学大系43 保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店・一九九二)のうち、栃木氏校注「保元物語」一〇五頁。引用も同書による。

三三 市古貞次・大島建彦校注『日本古典文学大系88 曾我物語』(岩波書店・一九八六)、二六一頁。

三四 前掲三十二のうち、栃木氏校注「保元物語」一〇二頁。

三五 永積安明・島田勇雄校注『日本古典文学大系31 保元物語 平治物語』(岩波書店・一九八六)、のうち「平治物語」一九七頁。

三六 以下の用例は、高木市之介ほか『日本古典文学大系32 平家物語 上』、『同33 平家物語 下』(岩波書店・一九五九、六〇)による。用例の検索は、金田一春彦ほか『平家物語総索引』(学習研究社・一九七三)によった。

三七 前掲三十六『平家物語 上』、三九〇頁。

三八 前掲三十六『平家物語 下』、八十二頁。

三九 前掲三十六『平家物語 下』、一七七頁。

四〇 前掲三十六『平家物語 下』、二七一頁。

四一 御橋惠言著『平家物語證注下 御橋惠言著作集 四』(続群書類聚完成会・二〇〇〇)、三六八頁。

四二 小林芳規編『古典文庫197 新撰朗詠集 解説文』(古典文庫・一九六三)。

四三 池上洵一校注『新日本古典文学大系35 今昔物語集 三』(岩波書店・一九九三)、二〇三頁。

(岩波書店・一九九六)、一五四〜一五五頁による。

四五 前掲四十三『今昔物語集 三』三、一九八〜二〇一頁。

四六 井上光貞・大曾根氏校注『日本思想大系7 往生傳 法華験記』(岩波書店・一九七四)のうち、「第日本法華経験記」六十六頁。

四七 久保田氏・大曾根氏編『鴨長明全集』(貴重本刊行会・二〇〇〇)のうち、「発心集(慶安四年版本)」第四、一五九頁。

四八 今野達校注『新日本古典文学大系33 今昔物語集 一』(岩波書店・一九九九)、一五五頁による。

四九 同書一六一〜一六二頁。

五〇 同書四六八〜七〇七頁。

五一 以下の引用は、森正人校注『新日本古典文学大系34 今昔物語集 二』(岩波書店・一九九六)、二五五頁による。

五二 前掲三十六『平家物語 下』、二〇七頁。

五三 前掲四十五『今昔物語集 三』、二九七頁。

五四 稲垣泰一著『今昔物語集』の世界—説話文学の系譜—(鈴木一雄編『日本文学新史 古代Ⅱ』至文堂・一九九〇)、二七四頁。

五五 『日本国語大辞典 第二版』(小学館)によると初例は一八九八年制定の帝国大学資金並学校及図書館館資所属森林原野並産物特別処分規則である。

五六 『日本後記』(七九二〜八三三年)や『御成敗式目』(二二二三年)にも林に関する令が定められているが、江戸時代成立の法令の方がはるかに細部にわたった内容である。ゆえに、今日までの林業の土台は近世期に成立したとされる(参考・所三男著『近世林業史の研究』吉川弘文館・一九八〇年)。

五七 明の王圻編。なお、『三才図会』に「林」「森」は立項されていない(参考・王圻・王思義編『三才図会』上海古籍出版社・一九八三年)。

五八 和漢三才圖會刊行委員会編集『和漢三才圖會上』(東京美術・一九七九)、六一二頁。

五九 文字の左右両方にルビがある場合、便宜上「右ルビ/左ルビ」と表記する。

六〇 以下の引用は近藤圭造校訂『類聚名物考 第二冊』(近藤活版所・一九〇四年)、二五七頁を元に、私に句読点を補った。

六一 一般的な訓でなく、漢字ないしは熟語の意味が当てられた訓の

- こと。
- 六十二 大石慎三郎校訂『地方凡例録下』（近藤出版社・一九六九年）、一二五頁。
- 六十三 一六七六年刊。俳諧辞書。俳諧（連句）における付合の題材、それに対する常套の付合語、注をいろは順に掲載したものである。
- 六十四 野間光辰鑑修『近世文藝叢刊第一巻 俳諧類船集』（般庵野間光辰先生華甲記念会・一九六五年）、三一頁。
- 六十五 B論文一四三頁参照。
- 六十六（もり）（はやし）がそれぞれ神社・寺院に歩み寄る過程は野呂香「日本古代文学における自然描写の変遷—和歌における（はやし）と（もり）の接近—」（東洋大学人間科学総合研究所紀要『第十二号・二〇一〇年』に詳しい。
- 六十七 入矢義高校注『新日本古典文学大系48 五山文学集』（岩波書店・一九九〇年）、六三頁。
- 六十八 礫崑玉編『古今類書纂要』（明代成立）より。長澤規矩也編『和刻本類書集成 第五輯』（汲古書院・一九七六年）、二九五頁。
- 六十九 上村観光編纂『五山文学全集 第一巻』（思文閣・一九七三年）うち「南游集」七三四頁。
- 七十 末木文美士・堀川貴司注『江戸漢詩選 第五巻「僧門」』（岩波書店・一九九六年）、八二頁、二五八頁。
- 七十一 坪内逍遙『小説神髓』に「稗史（よみほん―稿者注）体は、地の文を綴るには雅言七八分の雅俗折衷の文を用ひ、詞を綴るには雅言五六分の雅俗折衷文を用ふ」とある。（『日本近代文学大系3 坪内逍遙集』（角川書店・一九七四年）うち、中村完注釈『小説神髓』一一二頁。
- 七十二 以下の引用は『日本古典文学全集48 英草子 西山物語 雨月物語 春雨物語』（小学館・一九七三年）うち、高田衛校注・訳『雨月物語』による。「白峯」三三三頁〜四四四頁、「仏法僧」三八四頁〜九五頁、「吉備津の釜」三九六頁〜四一〇頁。
- 七十三 鶴月洋『雨月物語評釈』（角川書店・一九六九）、三七頁。
- 七十四 虎尾俊哉校注『神道大系古典編十一 延喜式（上）』（神道大系編纂会・一九九一年）、二六五頁。
- 七十五 注七十二に同じ。四三五頁。

- 七十六 この話の典拠作品は、浅井了意『伽婢子』中の「牡丹灯籠」である。「牡丹燈籠」にも林が登場するが、例えば林の中で不思議な目にあうというような物語の核を担う場所としては描かれなない。秋成が翻案に際し、林に新しく意味を持たせたと考えられる。
- 七十七 物語後半、正太郎は吉備津神社へ行き、占いをしてもらう。不吉な結果が出たため、呪符を貰う。
- 七十八 以下本文の引用は濱田啓介校訂『新潮日本古典集成別冊 南総里見八犬伝』（全十二巻・新潮社、二〇〇三〜〇四年）による。以降「八犬伝」本文引用に際して頁数を記す場合には、「巻数、頁数」の形式をとる。また、調査の都合上原本を参照した箇所があるが、その場合は東洋大学附属図書館蔵本を使用した。
- 七十九 馬琴の日記には原稿校正に関する記事が多数あるが、本文の校正であるか、ルビや左訓の校正であるのか等が克明に記されていない。また「八犬伝」は二一回に分けて出版されたが、新しい巻が発売されるごとに、以前発売された巻の校訂遺漏箇所を逐一挙げて巻頭ないし巻末に掲載している。そこにはルビの正誤も多数含まれる。この態度は失明して後、代筆をもって原稿を作成している時期でも変わらない。
- 八十 ちなみに近世初期にはルビ振りを専門とする筆耕もいたようであるが、必ずしも作者自身の意図が汲み取れるとは限らない。例えば井原西鶴『懷硯』（二六八七年）に一箇所「森」を「はやし」と訓ませた箇所がある（巻三「椿は生木の手足」）が、西鶴自身の意図かどうか判断つきかねるため、調査には慎重を期す。
- 八十一 「茂林」を「もり」と訓ませる例は古辞書や『忠義水滸伝解』をはじめとした『水滸伝』注釈書、馬琴がよく出典として使用する『名物六帖』にはない。はたしてどこから依拠したものか、現段階では判断し兼ねる。
- 八十二 黒板勝美・国史大系編集会編『新訂増補国史大系1上 日本書紀前篇』（吉川弘文館・一九六六年）、三五九頁。尚、諸本によっては「弱木株」とするが、江戸時代の人々に流布していた寛永九年版本では「弱木林」と熟される。
- 八十三 後藤丹治校注『日本古典文学大系61 椿説弓張月下』（岩波書店・一九六二年）、一九一頁頭注。
- 八十四 注八十一においても「左右に木立隙なければ林阪（しもとざか）」

ともこれをいふ」という『朝比奈巡嶋紀』の一文が紹介される。

八十四 注七十七、卷九解説、四四三頁。

八十五 B論文参照。

八十六

『平家物語』、『懐硯』の「モリ」については、前掲一、A論文一三五～三六頁、B論文一四六～四七頁をそれぞれ参照のこと。

追記

本論考は、東洋大学人間科学総合研究所平成二十二(二〇一〇)年度共同研究「『木』のある風景の系譜―日本における自然観の漢字文化・西洋文化受容―」(大野寿子、千艘秋男、石田仁志、野呂香、早川芳枝、池原陽斉、松岡芳恵、小泉京美、古田正幸)の研究成果の一部であるとともに、日本学術振興会科学研究費(基盤研究C)支給による平成二十一(二〇〇九)―二十三(二〇一一)年度共同研究「超越する「異界」―異文化研究・国語教育・エコロジ―教育の架け橋として―」(課題番号・二二五二〇三八三、研究代表者・大野寿子)の研究成果の一部でもある。

*一 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科国文学専攻

*二 人間科学総合研究所院生研究員・東洋大学大学院文学研究科国文学専攻

About the change in the meaning of the word woods in the Japanese classics literature

Akiyoshi IKEHARA *¹, Yoshie MATSUOKA *²

In this thesis, the change in the word woods (林) in the classical literature of Japan is considered. It is literature from the latter term of the Heian period (12 century) to Edo period (19 century) that becoming an object. The relation between the woods and the forest (森) is considered at the same time.

There is no big difference between the woods and the forest about the literature of Muromachi Period since the latter term of the Heian period. Because a divine spirit appears in the forest in , "Konjaku Monogatari-shu" (今昔物語集) in that, I can pay attention to it.

In the literature of the Edo period, in the forest, a Shinto shrine and the forest tend to be used next with a temple. By the haiku in particular, the tendency is remarkable. Like "Ugetsu Monogatari" (雨月物語), even the work that influence is strong of the Buddhism is the same tendency. There is the distinction by "Nansou Satomi Hakkenden" (南総里見八犬伝) of last years in a forest and the forest in the days of Edo, but, as for the contents, it is it in the same way.

The disappearance of the distinction of this forest and the forest will be succeeded in modern literature.

Key words: forest, 12 century to 19 century, Spirituality, Etymology

* 1 A graduate student in the Graduate School of Japanese Literature, and a graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University

* 2 A graduate student in the Graduate School of Japanese Literature, and a graduate member of the Institute of Human Sciences at Toyo University